

日本ホーリネス教団の戦争責任に関する私たちの告白

Our Confession Concerning the Wartime Responsibility of the Japan

Holiness Church

일본홀리네스교단의 전쟁책임에 관한 우리의 고백

日本聖教會教團對於戰爭責任的告白

— 目次 —

A. 日本語	③
B. 英語 (WH連公用語)	⑥
C. 韓国語	⑩
D. 中国語	⑬

A. 日本語

日本ホーリネス教団の戦争責任に関する私たちの告白

ホーリネス宣教百年の年を迎えようとしている今、私たち日本ホーリネス教団は、これまでの神の導きを心から感謝し、先達の信仰の戦いに思いを寄せています。そして、私たちが私たちの教会の歴史を振り返ることによってその歩みを省み、信仰の継承を目指すと共に、過去に犯した過ちをここに言い表します。

一 歴史を振り返って

明治憲法や教育勅語等によって、天皇神格化の波が日本に浸透しつつあった1901年、私たちの教会は宣教を開始いたしました。「四重の福音」を旗印として、日本全国と、アジア諸国へと宣教をすすめました。その働きによって、現在の私たちの教会が存在し、アジア諸国にホーリネス教会が建てられ、現在のアジア太平洋地域ホーリネス教会連盟のような実を結びました。

また、戦前の私たちの教会は、宗教法案や宗教団体法案による国家の宗教への介入や、神社参拝の強要に対して、信仰の戦いの意志を明確にもっていました。

しかしそれにもかかわらず私たちの教会は、日本の軍国主義と、それを支えた天皇制については、それを批判することなく、むしろ支持をしました。教会は、当時の日本が犯した侵略という過ちにも気づかず、天皇の名による戦争を「聖戦」と呼び、「皇室中心主義」や「敬神尊王」などと言って、その過ちを信仰の事柄と交錯し、支持をしました。そして、私たちの教会のアジア諸国への宣教は、宣教がその純粋な動機であったとは言え、その働きは日本の植民地政策に追随するものでありました。

さて、昭和十五年戦争下、私たちの教会は、治安維持法と宗教団体法によって不当に弾圧され、解散を余儀なくされました。そしてその信仰のゆえに命を奪われた牧師たち、裁判で命懸けの証言をして信仰を貫いた牧師たち、解散させられたために、社会的にも経済的にも困難な事態に陥りながらも信仰を守り続けた牧師家族や信徒たちのように、試練を乗り越えた先達の信仰の戦いによって、今日の私たちの教会があることは、神の守りの聖手が加わっていたためであると信ずるものです。

しかし、それ以前に私たちの教会は、リバイバル（信仰復興運動）の経験によって進展しつつも、その後、再臨信仰で躓き、教理の理解の相違から、同信の友と決別しました。そして、その後の宗教団体法案には反対の姿勢をもちや取り得ず、教会合同の流れに組み込まれていきました。しかも、それ以前から教会合同の気運があったために、宗教団体法を楯にした国家権力の圧力に屈したにもかかわらず、教会はそれを信仰的な決断であると理解しました。こうして成立した日本基督教団に、私たちの教会も参加しました。またその過程におい

て、同法によって天皇神格化を進める国家の圧力に屈し、再臨信仰に関する教義を変更しました。そして国策に従い、宮城遥拝や君が代斉唱などの国民儀礼や神社参拝を行い、さらに戦勝祈願、皇軍慰問献金、半島人徴兵制度実施感謝式の開催などの戦争協力を進めました。

また、弾圧に直面した時、私たちの教会は、自分たちの信仰が治安維持法に問われていることに気づきませんでした。それは、天皇を崇敬する愛国者を自負していたために、治安維持法のいう「国体の否定」に抵触するとは思っていなかったためであります。すなわち、キリスト教信仰の中に天皇制を受け入れていたのです。そして、天皇に仕えるのが日本人の本分であるという、「国民生活」という文を機関紙に載せ、天皇制へとすりよってしまいました。

拘禁された牧師たちの中には、裁判のために、それまでのキリスト教信仰を清算し、祖先崇拝などをして日本人として生きるという者たちや、神社参拝に積極的な姿勢を示す者たちもいました。また、私たちの教会は、再臨信仰が問題となっていることが分かった時、かつて分かれた同信の友の再臨信仰との違いを強調し、自らの身を守ろうとしました。それは、弾圧時に日本基督教団がホーリネス系教会を切り捨てたという自己保身の態度と変わらぬものでした。このような中で、信仰を捨てた信徒もおりました。

敗戦後、私たちの教会は復興を遂げ、その信仰の特徴を生かすために日本基督教団を離脱して今日に至っています。神の守りと導きのうちに、多くの実を結ぶことができました。靖国問題や天皇の代替わり、宗教法人法改正や、私たちの教会がもつ差別意識が糾弾されたことなどを通して、歴史や社会とのかかわりについて、学びを進めて来ました。

しかし、私たちのそのような問題意識はまだ徹底されたものではありません。むしろ、私たちの教会の関心は信仰の内面性に重点がおかれ、その結果、私たちの教会の社会とのかかわりは、希薄なものとなっています。

またこれまでの私たちの教会の歴史認識は、非常に狭められたものでした。それは、私たちの教会は、弾圧の被害者であるという意識を強く持っていたためです。しかし私たちの国が、かつての戦争や皇室を美化し、その過ちを水に流そうとしているのと同様に、私たちの教会も、自らの歴史を検証し、問題点を明らかにすることを怠ってきたことの責任は免れません。

また、本来、教会は、信仰告白を絆とする信仰共同体であります。しかし、私たちの教会の絆は、カリスマを持った指導者に負うところが大きく、それ自体は誤りではないとしても、その弊害は教会に「内なる天皇制」の問題を投げかけています。そのために、無責任な体質や、さきにふれた差別意識などを持っていると言わなければなりません。

二 これからの歩み

私たちのこの言葉は、戦時下の私たちの教会とキリスト教界、当事者個人の過ちを糾弾するものではありません。戦時下の教会を過ちに陥らせた天皇制の圧力は、今も姿を変えつつも存続しており、戦時下の教会が問われた信仰告白に生きることは、まさに今の私たちの課

題であります。

そこで私たちは自らを告発し、その責任を言い表します。

日本の進めた侵略戦争によって引き起こされた、神社参拝の強要、日本語教育の強制、虐殺、慰安婦の問題、そして今日では経済力による侵攻や民族の蔑視、責任の回避など、私たちは日本人として、このような国家の過ちについて連帯の責任を負うものです。また、教会の中にも民族蔑視の思いや、皇室に対する拭いきれない好意によって生じる、戦争容認などの誤った歴史の見方があることを、私たちは認めます。

また、私たちは日本人としての連帯責任を負うことによって、私たちの教会の信仰の問題を曖昧にはしません。天皇制社会に生きる私たちの、福音理解が問われていると考えます。私たちの強調してきました「聖書信仰」も、個人の内面的な信仰に重点がおかれ、社会とのかかわりの面は希薄でありました。その結果、アジア諸国の人々とその教会の気持ちばかりでなく、私たちの教団内の韓国人教会や、沖縄の諸教会と、そこに属する人々の気持ちについて、私たちの教会の理解は、あまりにも不十分なものでありました。

ここに私たちの教会は、自らの弱さと過ちを、神と人との前に悔い改めて言い表し、心から赦しを請うものであります。

まず、私たちの教会は、神社参拝や天皇崇拜などの偶像礼拝に墜ちてしまった罪を、神の前に悔い改めます。

そして、私たちの教会のアジア諸国への宣教が、日本の侵略戦争に追随するものであったことと、さまざまな戦争協力を行ってきたことを、アジア諸国の人々とその教会に謝罪します。

また、弾圧時の裁判の中で、かつての同信の友を切り捨てるような発言をしたことを、謝罪します。

また、日本基督教団が、旧ホーリネス系の教師及び家族、教会に対し、謝罪の意を表した時、私たちの教会は、それといった反応を示しませんでした。それは、戦時下、特に弾圧への対応によって生じた、私たちの教会と諸教派との亀裂が、今なお深い部分では癒えていないためです。このことについて私たちの教会は、自らを正当化せず、責任をも自覚するものですが、和解の必要を感じています。

今後、私たちの教会は、「日本ホーリネス教団の信仰告白」に基づいて、神のみこころに適う教会の形成を目指します。また、歴史に学ぶことを忘れずに、私たちが置かれている時代と社会の状況を見極めることができるような体制によって、社会への責任を果たすことを目指します。そして、アジア諸国の人々の心情を理解することを努めるとともに、特に私たちに与えられている、アジア太平洋地域ホーリネス教会連盟の交わりを豊かなものとすることを目指します。

ホーリネス宣教百年を迎えようとするこのとき、共同体の罪を自らのものとして懺悔した、指導者ネヘミヤ（ネヘミヤ記第1章4～11節）やダニエル（ダニエル書第9章1～11節）

の祈りに学びつつ、悔い改めと信仰をもって立ち上がる覚悟であります。そして21世紀を迎えようとする今、私たちは、私たちの教会の歩みが神のみこころに適い、神と人に仕えることができるよう、願っています。

1997年3月20日
日本ホーリネス教団第34回総会

B. 英語 (WH連公用語)

Our Confession Concerning the Wartime Responsibility of the Japan Holiness Church

Now, in anticipation of the 100th anniversary of Holiness missions [in AD 2001], we, the Japan Holiness Church [hereafter, JHC], give thanks to God for his guidance in the past and are reminded of the struggles of faith of our predecessors. Therefore, as we look back upon the history of our church, reflecting upon the course taken by our church, we affirm the inheritance of that faith but also confess to the transgressions committed in the past.

I. Reflections on Our History

In 1901 when the movement to divinize the Japanese Emperor permeated Japan—based upon the authority of the Meiji Constitution and the Imperial Rescript of Education—our church began its mission activities. Under the banner of the "Four-fold Gospel," mission work was extended throughout Japan and to several other Asian countries. Through these activities our present church in Japan came into being and Holiness churches in other Asian countries were established, creating today the Asia Pacific Holiness Federation.

Further, before World War II our churches clearly intended to oppose in faith the religious interference of the state—based upon the Religion and the Religious Bodies (Control) Acts¹—and the requirement to worship at Shinto shrines.

Nevertheless, our churches did not criticize Japanese militarism and the Japanese Emperor system that supported it, but rather endorsed it. We were not aware the transgressions of the Japanese invasions

¹ To control all aspects of the religious life of all religions in Japan, the state registered all religious groups, except State Shinto, under the Religious Bodies Law of 1939. Since the state limited membership to groups with a minimum of 50 congregations and 5000 members, only seven Protestant denominations could qualify. This led most denominations to unite to form a united Protestant church and to sever relationships with foreign mission societies.

and even designated the war fought in the name of the Emperor as a "Holy War," repeating such slogans as the ideology of the "Emperor as the highest priority" and "Honor God and revere the Emperor." Thus, by mixing these slogans with matters of faith, we supported the nation's transgressions. As a consequence, our missions to other Asian nations—missions which had the purest of motivations—followed the path of Japanese colonialization policies.

Further, during the fifteen-year war of the Showa era [1931-45], we were unjustly suppressed and forcibly disbanded under the Peace Preservation Law [of 1925] and the Religious Bodies Law. Some pastors because of their faith lost their lives, other pastors kept their faith by risking their lives in testimony in court trials, and pastors' families and lay people maintained their faith while suffering severe hardships socially and economically because of the closing of the churches. Therefore, we believe that through the struggles of faith of our predecessors in overcoming adversities and because of the protecting hand of God, our church exists today.

Earlier [in 1933], however, as we were expanding through revival meetings (faith-renewal movements), we stumbled because of differences in the doctrinal interpretation of the belief in the second coming of Christ, causing division among brethren of the same faith. Later, with the passage of the Religious Bodies Act [in 1939] and when opposition to this law became impossible, our divided churches joined the movement toward church union. Moreover, because there was an earlier trend toward church union, the churches interpreted this union now as a decision of faith, not withstanding the fact that under the pretext of the Religious Bodies Law, they had succumbed to the pressures of the authority of the state. Thus, we also participated in the establishment of the United Church of Christ in Japan. Further, in the process of joining the United Church and under this same law which promoted the divinization of the Emperor, we submitted to the pressures of the state and altered our doctrine concerning our belief in the second coming of Christ. Further, we obeyed state policies by performing the national rituals of worshipping from afar [by bowing toward] the Imperial palace and singing the national anthem ["Hail to the Imperial Reign"], and by worshipping at Shinto shrines. In addition, we cooperated with the war effort by such acts as praying for a victory in war, donating funds for the consolation of the imperial troops, and holding a celebration for the enactment of a system of conscription of the Korean people.

Further, when confronted by oppression, we did not realize that our faith would be questioned under the Peace Preservation Law. Because of our self-assurance in our patriotism and reverence for the Emperor, we did not think that we were in conflict with the Peace Preservation Law on the denial of the national polity (*kokutai*),² that is, we had accepted the Japanese Emperor system into our Christian faith. Thus we drew close to the Imperial system when we published a pamphlet, entitled "National Life," on the Japanese duty to serve the Emperor.

² *kokutai* refers to the national political system, regarded as unique to Japan and as embodied in the Japanese Emperor system. The Peace Preservation Law of 1925 prohibited organizing any association with the objective of altering the *kokutai*.

In court trials among the imprisoned pastors, some compromised their Christian faith, and as Japanese citizens revived ancestral worship; others displayed a positive attitude toward worship at Shinto shrines. Further, when our pastors realized that belief in the second coming of Christ was a problem, they attempted to defend themselves by focusing upon the differences in the belief of the second coming between themselves and their separated brethren. That defensiveness was not different from the self-protecting attitude taken by the United Church of Christ in Japan during the time of oppression, when they severed relations with the Holiness family of churches. In the midst of these difficult times, lay people also abandoned their faith.

After the defeat of World War II, JHC seceded from the United Church of Christ in Japan and re-established itself until today in order to revive its distinctive faith. Since then, under the protection of God and by His leading, JHC has brought forth much fruit. Further, we have learned much about historical and social issues through such recent events as the Yasukuni Shrine,³ the succession of Emperors,⁴ the revision of the Religious Juridical Law (of 1945),⁵ and the censure of the church for attitudes of social discrimination.

Nevertheless, our understanding of social issues remains underdeveloped. Because of the emphasis of our church on the vertical dimension of faith, the relationship of our church to society remains superficial.

Furthermore, until recently, our church's understanding of history has been extremely narrow, because the dominant view has been that our church had been the victim of oppression. Our church, however, has avoided taking responsibility for the failure to examine our own history and to clarify the controversial issues, in the same way as our nation has allowed the transgressions of the past to be forgotten, like water flowing under a bridge, by glorifying the past war and the Emperor.

Further, the church in essence is a community of faith unified by a confession of faith. However, often the unity of our church is borne by charismatic leaders. Even though charismatic leadership itself may not be an error, its abuse in the church raises the question of a potential "internal emperor system," a system which has a constitutional tendency toward irresponsibility and the earlier mentioned attitude of discrimination.

II. Towards the Future

³ Yasukuni Shrine represents a separation of religion-and-state issue: in this case, public funding is used to support a national war memorial that is also a Shinto shrine.

⁴ The succession of Emperors from Showa to Heisei in 1989 involved national and public coronation ceremonies that were religious (Shinto) and supported by public funds. Also the continuation of naming the era according to the reigning (Shinto) Emperor has raised problems for some Christians.

⁵ The Religious Juridical Law of 1945, which replaced the Religious Bodies Law of 1939, is being revised to curtail religious freedom in the context of the recent Aum Shinrikyo incident.

The purpose of our statements here is not to censure the wrongdoings committed during World War II by JHC, other Japanese churches, or the individuals concerned. Rather, even though the form has changed, the pressures of the Emperor system, which caused the wartime church to fall into transgression, continue today. Consequently, the issue for us today is how to live according to the confession of faith, which the wartime church did not fulfill.

Hereupon we indict ourselves and confess our responsibilities.

We, as Japanese citizens, in social solidarity bear responsibility for the transgressions of the nation brought about by Japan's war of aggression, such as forced worship at Shinto shrines, compulsory Japanese language education, genocide, comfort women for the Japanese military, and today through economic power violent assault and contempt against other ethnic groups, and the evasion of responsibility. Further, we recognize that even in the church there were mistaken historical views that justified the war, displaying goodwill toward the Imperial family and contempt for other ethnic groups.

Further, by bearing responsibility in solidarity with the Japanese people, we do not mean to obscure the question of the faithfulness of our church. We, who live in a society dominated by the Japanese Emperor system, need to consider how we understand the gospel. Because our strong emphasis on "Biblical faith" focused upon individual piety, our relationship to society became superficial. As a result, our church has not only failed to understand the feelings of the peoples and churches of other Asian nations, but also the feelings of the peoples of Korea and Okinawa, whose churches are of our own denomination.

Now, we do repent before God and humanity our weaknesses and transgressions and do sincerely ask for forgiveness.

Above all, we repent before God the sin committed by our church, of idolatrous worship at Shinto shrines and of devotion to the Emperor.

Therefore, we apologize to the other Asian nations and their churches that our mission to these nations cooperated with the war effort, following the path the Japanese war of aggression.

Further, we apologize for testimony given during the time of oppression in court trails that betrayed our fellow Christians who were once of the same faith.

Further, we did not respond when the United Church of Christ in Japan apologized to the churches, pastors and family members of the former Holiness related churches. That is because even today the division that arose during the war between our church and the other denominations over the appropriate response to oppression, in a large part, has not been healed. Concerning this matter, we, without self-justification and conscious of our responsibility, feels the necessity of reconciliation.

Hereafter, we resolve to build up the church according to the will of God, based upon the "Confession of Faith of the Japan Holiness Church." Further, we resolve to fulfill our responsibility to society by a structure in which we can discern, without forgetting the lessons of history, the circumstances of the time and place in which we live. Therefore, we resolve to understand the hearts of the peoples of the other Asian nations and, in particular, given to us, to enrich the fellowship of the Asia

Pacific Holiness Federation.

In preparation for the 100th anniversary of the Holiness missions, in repentance and faith we resolve—following the prayer of penitence of our biblical forefathers, Nehemiah (1:4-11) and Daniel (9:1-11)—to confess the sins of the community as our sins. Now, as we approach the 21st century, we pledge that the course of our church will follow the will of God in service to God and humanity.

March 20, 1997

The Japan Holiness Church 34th General Conference

C. 韓國語

일본홀리네스교단의 전쟁책임에 관한 우리의 고백

교단 선교 100 년의 해를 맞이하려고 하는 이 때 우리 일본홀리네스교단은 지금까지 인도하신 하나님께 진심으로 감사드리며 선진들의 믿음의 싸움에 마음을 기울이고 있습니다. 우리는 우리 교회의 역사를 되돌아 봄으로 인해 그 발걸음을 반성하고 신앙의 계승을 목표로함과 동시에 과거에 범한 잘못을 이 곳에 고백합니다.

1. 역사를 되돌아보며

명치헌법과 교육칙어등에 의해서 천황신격화의 파도가 일본에 침투하고 있던 1901 년 우리 교회는 선교를 시작하였습니다. 「사중복음」을 표제로 일본 전국과 아시아의 각 나라를 향하여 선교를 진행하였습니다. 그 사역으로 현재의 우리 교회가 존재하게 되고 아시아의 각 나라에 성결교회가 세워졌으며 아시아태평양성결교회연맹(현세계성결교회연맹)과 같은 열매를 맺게 되었습니다.

또한 전쟁전의 우리 교회는 종교법안이나 종교단체법안에 의한 국가의 종교개입이나 신사참배 강요에 대해서 믿음으로 싸울 의지를 명확하게 갖고 있었습니다.

그러나 그럼에도 불구하고 우리 교회는 일본의 군국주의와 그것을 지탱해준 천황제에 관해서는 그것을 비판하지 않고 오히려 지지했습니다. 교회는 당시의 일본이 범한 침략이라고 하는 잘못을 깨닫지 못하고 천황의 이름에 의한 전쟁을 「성전」이라 부르고 「황실중심주의」나 「경신종왕」등을 말하면서 그 잘못을 신앙의 내용과 교착시키며 지지했습니다. 그리고 우리 교회의 아시아 각 나라를 향한 선교가 순수한 동기이기는 했지만 그 사역은 일본의 식민지정책에 추종하는 것이었습니다.

소화의 15년전쟁중 우리 교회는 치안유지법이나 종교단체법에 의해서 부당히 탄압을 받고 해산하지 않으면 안되었습니다. 그리고 그 믿음으로 인하여 생명을 빼앗겼던 목사들이나 재판에서 목숨을 걸고 증언하여 신앙을 관철했던 목사들, 해산당함으로써

인하여 사회적 경제적으로 곤란한 사태에 직면하면서도 믿음을 지켜나갔던 목사가족이나 신도들처럼 시련을 넘어온 선진들의 믿음의 싸움으로 인하여 오늘의 우리 교회가 있다고 하는 것은 하나님의 보호의 손길이 있었기 때문이었습니다.

그러나 이러한 것 이전에 우리 교회는 리바이블(신앙부흥운동)의 경험으로 전진하고 있었음에도 불구하고 그 후 재림신앙에 걸려서 교리이해에 관한 상위함으로 인해 같은 신앙을 가진 형제와 결별하였습니다. 그리고 그 후 종교단체법안에는 더이상 반대의 자세를 갖지 못한채 교회통합의 흐름에 합류되어져 갔습니다. 게다가 이전부터 교회통합의 움직임이 있었던 종교단체법을 방패막이로 하는 국가권력에 의한 압력에 굴하였음에도 불구하고 교회는 그 것을 신앙적 결단이라고 이해하였습니다. 이렇게해서 성립된 일본기독교단에 우리 교회도 동참하였습니다. 또한 그 과정에 있어서 동법에 의한 천황신격화를 진행하는 국가의 압력에 굴복하고 재림신앙에 관한 교리를 변경하였습니다. 그리하여 국가정책에 따라 궁성요배와 기미가요제창 등의 국민의례나 신사참배를 행하고 나아가 전쟁승리기원, 황군위문헌금, 조선인징병제도실시의 감사예식개최 등의 전쟁협력을 진행하였습니다.

또한 탄압에 직면했을 때 우리 교회는 자신들의 신앙이 치안유지법에 위배되어 있음을 깨닫지 못하였습니다. 그 것은 천황을 숭경하는 애국자로서 자부하고 있음으로 인하여 치안법이 말하는 「국체의 부정」에 저촉되어 있음을 생각지도 못하였기 때문이었습니다. 즉 기독교신앙 안에 천황제를 받아들이고 있었던 것입니다. 그리고 천황을 섬기는 것이 일본인의 본분이라고 해서 「국민생활」이라는 문장을 교단의 기관지에 싣고 천황제에 점점 다가갔던 것입니다.

구급된 목사들 중에는 재판때문에 그 때까지의 기독교신앙을 청산하고 선조숭배등을 하며 일본인으로서 살겠다고 하는 자나 신사참배에 적극적인 자세를 표명하는 자들도 있었습니다. 또한 우리 교회는 재림신앙이 문제가 되고 있다는 것을 알았을 때에 이전에 결별한 같은 신앙을 갖고 있는 형제의 재림신앙과는 다르다는 것을 강조하고 스스로의 몸을 지키려고 하였습니다. 그 것은 탄압시에 일본기독교단이 홀리네스계통의 교단을 잘라버린 자기보호태도와 별반 다르게 없는 것이었습니다. 그러한 가운데 믿음을 버리는 신자도 있었습니다.

패전후 우리 교회는 부흥을 이루었고 그 신앙의 특징을 살리기 위해서 일본기독교단을 탈퇴하여 오늘에 이르고 있는데, 하나님의 보호와 인도하심 가운데 많은 열매를 맺을 수가 있었습니다. 야스쿠니문제나 천황즉위시의 제반의식, 종교법인법 개정, 우리 교회가 갖고 있는 차별의식이 규탄받는것 등을 통해서 역사나 사회와의 관계에 대해 연구해 왔습니다.

그러나 우리의 그러한 문제의식은 아직도 철저히 규명되지 못한 것이었습니다. 오히려 우리 교회의 관심은 신앙의 내면성에 중점이 놓여져 있었고 그 결과 우리 교회와 사회의 관계는 희박한 관계가 되어 버렸습니다.

또한 지금까지의 우리 교회 역사의식은 아주 편협한 것이었습니다. 그 것은 우리 교회가 탄압의 희생자라고 하는 의식을 강하게 갖고 있었기 때문이었습니다. 우리나라가 과거의 전쟁과 황실을 미화하고 그 잘못을 흘려 보내려고 하는 것과 마찬가지로 우리

교회도 스스로의 역사를 검증하고 문제점을 분명하게 하는 것을 태만히 해 온 책임은 피할 수 없는 것입니다.

또한 본래 교회는 신앙고백을 연결고리로 하는 신앙공동체입니다. 그러나 우리 교회의 연결고리가 카리스마를 가진 지도자가 떠맡는 부분이 커져 그 자체가 잘못된 것은 아니라 할찌라도 그 폐해는 교회에 「내적천황제」 문제를 야기시키고 있는 것입니다. 그런 연유로 무책임한 체질이나 앞에서 언급한 차별의식 등을 갖고 있다고 말하지 않을 수 없는 것입니다.

2. 이제부터의 발걸음

우리의 이 고백의 말은 전시하의 우리 교회와 기독교 교계, 당사자 개인의 실수를 규탄하고자 하는 것이 아닙니다. 전시하의 교회를 실패속으로 떨어뜨린 천황제의 압력은 지금도 모습을 바꾸면서 여전히 존속하고 있으며, 전시하의 교회가 추궁당한 신앙고백에 산다고 하는 것은 참으로 지금 우리가 당면한 과제인 것입니다. 이에 우리는 스스로를 고발하고 그 책임을 명확히 하는 바입니다.

일본이 진행한 침략전쟁에 의해서 일어난 신사참배의 강요, 일본어교육의 강제시행, 학살, 위안부문제, 그리고 오늘날에 있어서는 경제력에 의한 침공이나 민족경시, 책임회피등 우리는 일본인으로서 이러한 국가의 잘못에 관해서 연대책임을 지는 바입니다. 또한 교회안에서도 민족경시나 황실에 대한 씻어낼 수 없는 호의에 의해서 생기는 전쟁용인 등의 잘못된 역사적 시각이 있음을 우리는 인정합니다.

또한 우리는 일본인으로서 연대책임을 짐으로 인하여 우리 교회의 신앙 문제를 애매모호한 것으로 하지 않겠습니다. 천황제 사회에 살고 있는 우리의 복음이해가 추궁되어지고 있다고 생각합니다. 우리가 강조해 온 「말씀신앙」도 개인의 내면적인 신앙에 중점이 놓여져 있어서 사회와의 관계적인면이 희박했습니다. 그 결과 아시아 여러나라의 사람들과 그 교회들의 생각뿐만이 아닌 우리 교단내의 한국인교회나 오키나와의 모든 교회, 거기에 소속하는 사람들의 생각에 관해서 우리 교회의 이해는 너무나도 불충분한 것이었습니다. 이에 우리 교회는 스스로의 연약함과 잘못을 하나님과 사람 앞에서 회개함으로 고백하고 마음으로부터의 용서를 비는 바입니다.

먼저 우리 교회는 신사참배나 천황숭배등의 위상숭배에 빠져버린 죄를 하나님 앞에서 회개합니다. 그리고 우리 교회의 아시아 여러나라에 대한 선교가 일본의 침략전쟁에 추종하는 것이었다는 것과 여러가지로 전쟁협력을 행해 왔음을 아시아 여러나라의 사람들과 그 교회에 사죄합니다.

또한 탄압시의 재판 가운데 그 당시 같은 신앙을 갖고 있던 친구를 배제하려고 하는 발언을 했던 것을 사죄합니다.

또한 일본기독교단원이 구홀리네스 계통의 목사 및 가족, 교회에 대해서 사죄의 뜻을 표명했을때 우리 교회는 그렇다할만한 대응을 표시하지 않았습니다. 그것은 전시하 특히 탄압에의 대응으로 생긴 우리 교회와 모든 교파와의 균열이 아직도 여전히 깊은 부분에서는 낫지 않고 있기 때문입니다. 이것에 관해서 우리 교회는 스스로를 정당화하지 않고

책임감을 자각하며 화해의 필요성을 느끼고 있습니다.

금후 우리 교회는 「일본홀리네스교단의 신앙고백」에 기초해서 하나님의 뜻에 합당한 교회형성을 지향하겠습니다. 또한 역사를 통해 배우기를 잊지 않고 우리가 놓여 있는 시대와 사회적 상황을 충분히 돌아볼 수 있는 체제로 사회로의 책임을 다 할 것을 지향합니다. 그리고 아시아의 모든나라 사람들의 심정을 이해하고자 노력함과 동시에 특히 우리에게 주어져 있는 아시아태평양성결교회연맹(현재세계성결교회연맹)과의 교류가 풍성할 것이 되도록 지향하겠습니다.

교단 선교 100년을 맞이하고자 하는 이 때 공동체의 죄를 자신의 죄로 참회한 지도자 느헤미야(느헤미야 1 장 4 절~11 절)와 다니엘(다니엘 9 장 1 절~11 절)의 기도를 배우면서 회개와 신앙으로 일어설 각오입니다. 그리고 21 세기를 맞이하고자 하는 지금 우리는 우리 교회의 발걸음이 하나님 뜻에 합당하고 하나님과 사람을 섬길 수 있기를 소원합니다.

1997년 3월 20일
일본홀리네스교단 제34회총회

D. 中国語

日本聖教會教團對於戰爭責任的告白

在迎接聖教會一百年的宣教活動的同時，我們日本聖教會教團從心裡感謝神的引導，以及紀念前輩在信仰上所付出的爭戰。我們也藉著回顧過去的教會歷史，反省這一路走過的腳步，在朝著繼承過去信仰的目標邁進的同時，也在此表明我們過去所犯的過錯。

一 回顧歷史

在1901年頒佈了明治憲法以及教育敕語，天皇的神格化的波浪在日本漸漸滲透的同時，我們教會也開始了宣教的活動。打著「四重福音」的旗幟，我們在日本全國及亞洲各國展開了宣教工作。因為這樣的活動，我們教會才能夠存在，在亞洲各國建立聖教會，以致結出亞太地區聖教會聯盟這樣的果子。

另外在戰前，我們的教會對於國家藉著宗教法案以及宗教團體法案而來的宗教干涉，以及強制對神社的參拜活動，我們也以堅定的意志明確表明要打信仰的仗。

然而，我們的教會對於日本的軍國主義，以及作為其支柱的天皇制度，並沒有一絲的批評，反而是支持。教會對於當時所犯下侵略的錯誤並沒有留意，反而認為是以天皇之名所發動的「聖戰」，又或者稱此為「皇室中心主義」、「敬神尊王」，這種錯誤與信仰的事情交錯之下，因此支持了侵略戰爭。另外，我們的教會雖然抱著純粹宣教的動機，對亞洲各國展開宣教，然而也不可否認這是追隨日本的殖民地政策下的結果。

接著，在昭和十五年（的）戰爭之下，教會在治安維持及宗教團體法的名義之下被鎮壓，甚至不得不被迫解散。在當中有因此而喪命的牧師，還有在審判中不顧性命為貫徹信仰的緣故作證的牧師，另外還有因為教會解散而陷入經濟社會上的困境，但是卻繼續持守信仰的牧師家族及信徒。由於這些前輩超越試煉的信心爭戰，我們相信今天教會還能夠存在，完全都是上帝的手一直在保守我們的結果。

可是，在此之前的我們教會雖然有復興運動的經驗，但是卻因為對基督再來的教義上看法有所不同，因此與相同信仰的朋友決別。此後我們對宗教團體法無法持反對的態度，就在教會聯合的潮流下被統合起來。並且由於教會聯合的聲勢，我們雖然屈服於國家藉著宗教團體法的名義所展現的權力，但是我們自己也以此為信仰上所作的決定，也參加了因此而成立的日本基督教團。藉由這樣的過程，我們屈服在國家倡導天皇神格化的權力之下，而且也改變了對基督再來的教義看法。接著由於服從國家政策，我們也遵從譬如向皇宮遙拜、國歌齊唱等國民禮儀，或者舉行神社參拜、祈禱戰事勝利、向皇軍慰問奉獻，以及舉行半島人徵兵制度感謝儀式等協助戰爭的活動。

另外在面臨鎮壓的時候，我們並沒有察覺到自己的信仰會觸及到治安維持法。我們認為我們是崇敬天皇的愛國者、所以沒有想到自己會觸犯到在治安維持法所主張的「否定國家體制」的概念。換句話說，我們的信仰已經接受了天皇制的觀念。而且在日本人傳統以服事天皇為本分之「國民生活」的文章，也刊登在內部的刊物上，無形中已經貼近了天皇制的思想。

在被囚禁的牧師當中，因為審判的緣故，有些人清算自己基督教的信仰，或要崇拜祖先來過日本人的生活，又或者有對參與參拜神社表現積極態度的人。另外，當我們知道對基督再來的信仰成為問題時，我們就強調自己跟以前分手相同信仰朋友的再臨信仰不同，以自保己身。這和日本基督教團面臨鎮壓時，捨棄聖教會系統以自保己身的態度是沒有兩樣的。在這當中，也有信徒因此拋棄了信仰。

戰敗之後，教會逐漸復興，為了展現信仰的特色，我們脫離了日本基督教團直到如今。在神的保護與引領之下，我們結出了許多果子。在靖國神社問題及天皇的改朝換代，以及宗教法人的修正，我們教會所擁有的歧視意識被糾正過來，也逐漸學習到自己與歷史和社會的關係。

然而，我們對這些問題意識尚未徹底深入整個教團。甚至我們教會關心的重點仍然在信仰的內面，結果就造成教會與社會的關連非常淡薄。

另外，我們教會對歷史的認識非常狹窄。這是因為教會保持著非常強烈的鎮壓被害者意識的緣故。然而就像我們的國家對於戰爭和皇室過度美化，將所犯的錯付諸流水一樣，我們教會也同樣怠於檢視歷史，讓問題點真相大白，這樣的責任是不能推卸的。

再來，本來教會應該是以信仰告白為聯繫的信仰共同體。然而，我們教會的聯繫卻在於富有魅力的領袖所擔負，就算這沒有大錯，卻在教會內產生「內在的天皇制」問題，以致於我們不得不說教會的體質變成不負責任，或者有了像剛才所提到的歧視意識。

二 展望未來

我們要說的，並不是要譴責在戰時我們教會和基督教界，以及當事者個人的過犯。在戰時教會在面臨天皇制壓力時所犯的錯誤，在今天雖然面貌不同，但是壓力卻仍然存在。在戰時教會

被迫問要活出信仰告白的问题，正好也是我們今天所面臨的課題。

在此我們檢舉自己，將我們的責任表明出來。

日本因發動侵略戰爭所引起之強迫參拜神社、強制日文教育、虐待殺害、慰安婦問題，以及今天靠著經濟力量的侵略或輕視其他民族、迴避責任等問題，我們身為日本人，對於國家這樣的過犯也負有連帶責任。另外我們也承認，在教會中有輕視其他民族的思想，以及對於皇室無法抹滅的好感而產生對戰爭的容認等錯誤的歷史看法。

而且，由於日本人對此負有連帶責任，所以我們教會對信仰的問題也不能曖昧。我們在天皇制的社會下生存，不能不考慮自己對福音的理解。我們所一路強調的「聖經信仰」，由於重點放在個人內面的信仰，因此對社會的關連就而淡薄。結果我們教會不只是不瞭解亞洲各國的人民及其教會的心情，對於教團內的韓國人教會、沖繩的教會及其信徒的心情，我們的理解也太不足。

在此，我們教會對於自己的軟弱與過犯，在神和人的面前表示悔改，誠心請求大家的赦免。

首先，我們教會對於陷入參拜神社以及崇拜天皇等偶像崇拜的罪，在神面前悔改。

還有，我們教會對亞洲各國的宣教乃是伴隨侵略戰爭，而且作了許多協助戰爭的工作，我們對此向亞洲各國的人民及教會表示謝罪之意。

另外，我們在鎮壓時的審判當中，發言拋棄相同信仰的朋友，我們對此也表示謝罪之意。

另外，在日本基督教團對舊聖教會系統的教師及家族、教會表示謝罪之意時，我們教會對此並沒有任何反應。這是因為我們在戰時因為鎮壓的回應，而與其他教派產生的裂痕，在此時仍未得到醫治的緣故。我們教會對此深感我們不應該自我正當化，而且也負有責任，更認為我們有和解的必要。

今後，我們教會基於在去年所制訂的「日本聖教會教團信仰告白」，朝著成為合神心意的教會目標邁進。並且我們不忘記從歷史學來的教訓，建立一個能看清我們所處時代與社會的狀況的體制，以達成善盡社會責任的目標。並且在努力體會亞洲各國人民的心情的時候，特別要與亞太地區的聖教會聯盟有豐盛的交通為目標。

在聖教會迎接宣教一百週年的時候，我們把共同體所犯的罪當作自己的罪一樣懺悔，學習像尼希米（尼希米記 1 章 4-11 節）或但以理（但以理書 9 章 1-11 節）的禱告，以悔改與信心來開始。在迎接 21 世紀的今天，我們也期盼我們以及教會未來的腳步，能夠合神的心意，來服事神與服事人。

1997 年 3 月 20 日

日本聖教會教團第 34 次總會

日本ホーリネス教団
福音による和解委員会
2009/2010